

研究・調査報告書

報告書番号	担当
11	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Stigma and treatment for alcohol disorders in the United States. アルコール症における羞恥心と受療行動について；アメリカ	
執筆者	
Keyes KM, Hatzenbuehler ML, McLaughlin KA, Link B, Olfson M, Grant BF, Hasin D	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Am J Epidemiol. 2010 Dec 15;172(12):1364-72	
キーワード	
飲酒、断酒会、アルコール依存、精神障害、心理療法、羞恥心	
要 旨	
<p>目的： アルコール問題を抱える成人のアメリカを代表しうる対象集団において、アルコール症による羞恥心がアルコール症の受療行動を減少させ得るのか検証した。</p> <p>方法： アメリカの 20 歳以上の 34,653 名を対象に面接調査を行って得られたデータを用いた。DSM-IV に基づくアルコール障害のインタビュー調査(AUDADIS- IV)を用いて、アルコール乱用・依存の診断を行った。羞恥心は Perceived Devaluation-Discrimination Scale で測定した。主要評価項目は専門機関の利用を含む生涯の受療行動と 1 2 段階のアルコール障害とした。</p> <p>結果： アルコール障害の診断を受けた人は、アルコール障害に強い羞恥心を感じた場合に、アルコール関連のサービスを利用しにくい傾向がある(オッズ比 0.37, 95%CI 0.18-0.76)。羞恥心を強く受けることに関連していたのは、男性であること($\beta=-0.75$, $p<0.01$)、非ヒスパニック系白人と比較した非白人、低所得($\beta=1.0$, $p<0.01$)、教育歴($\beta=1.48$, $p<0.01$)、婚姻歴($\beta=0.47$, $p=0.02$)であった。アルコール障害を濃厚に持つ者は、羞恥心は少なかった。</p> <p>結論： 強い羞恥心と受療行動の欠如の関係から、羞恥心を減少させることはアルコール症の解決につながる公衆衛生の促進に寄与するだろう。</p>	